２０２０年度　入門講座

**第十七課　主の祈り**

１０月１１日

　　　　「わたしを呼ぶ声があなたの心に起こるや否や、

あなたの神である私は馳せつけるであろう」（イザヤ６５：２４）

祈りは魂の深呼吸です。神と自分との関わりを深めていくことは、祈りなくしてできません。

神は私たちを無条件に愛し、ありのままに受け入れてくださるということを心にとめて、自分

のすべてを携えて神の前に出る祈りは、私たちの心を清め、純化する効果もあります。

祈る時正直であることが大事です。自分を不愉快にさせたり、不安の種になったり、心の平和を乱したりする事柄を神のみ前に持っていきましょう。恨み、嫉妬心、怒り、利己主義、失敗も罪の全てが祈りの材料になります。

**Ⅰイエス・キリストが教えてくださった｢主の祈り｣**；マタイ６：９－１３

　　弟子たちは祈りたいと思っていたし、願いたいことも知っていましたが、でもどのように祈り始めたら

よいかわかりませんでした。そこで、「主よ、私たちに祈ることを教えて下さい」と願いました。

弟子たちにイエスの教えて下さった祈りが「主の祈り」です。

主の祈りは、福音全体をまとめている祈りで、イエスの生涯すべてを総合したものです。

「この祈りには考えられるすべての豊かさが含まれています。この祈りのすべての言葉に集中

しながら一度だけでも唱えるならば、必ず何らかの現実的な変化が起きます。それがごく小さ

なものであっても魂のうちに変化が産み出されます。

（シモーヌ・ヴェイユ『神を待ち望む』ミラノ1972年、194P）

＊シモーヌ・ヴェイユは1943年に若くして亡くなったユダヤ人の偉大な宗教思想家です。

Ｑまずゆっくりと心をこめて“主の祈り”を唱えましょう。

２０００年来祈り続けられてきた主の祈りです。あなたはどの言葉にどんな思いをこめるでしょうか？

現代人にとって合わない言葉や考え、あなたにとって親しめない言葉や考えがあるでしょうか？

前半

すべて主語が「神」である。私たちが祈りの場の中心に立つのでなく、神に祈りの場の中心に

立ってもらうことから始める。神の尊厳を思い起こし、神の御心を受け入れることから始まる。

あなたがたの父であり、あなたがたの王である神がふさわしく賛美され、その支配がこの地上に及ぶことを祈ります。

1. **天におられるわれらの父よ　み名が聖とされますように**

また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、

言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。 彼らのまねをしてはならない。

あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。 だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。 （マタイ６：７～９）

* 1. イエスが神について語るときは、ほとんど「父よ」と呼びかけている。

「私が父の家にいなければならないことを、ご存じなかったのですか」（ルカ２：49）

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります」「父よ、彼らをお赦し下さい・・・」

「父よ、わたしの霊をあなたに委ねます」（ルカ23：34、46）

父と言う呼称「アッバ」は当時のアラム語で「お父さん、パパ」と親しみをこめた優しい呼称。イエスのおん父への根本的な信頼の表れである。私たちにも、子供のような心で、飾り気のない信頼をもって、「アバ父よ」と祈ることを教えた。

「わたしたちの父よ」（主の祈り）の言葉は、わたしたちが神の子どもたちであることとセットになっている。「父よ」と唱えるたびに、「私の子よ、私の子どもたちよ」という神からの呼びかけを聴く。

ここで、全地の王であり主である神と私たちの関係がはっきりと確定されている。その関係は、神と人間、人と人との間の信頼関係であり親密さである。

「われらの」父であれば、みな兄弟ということである。人間が人として持つ唯一の価値は「人間は皆神の子である」ということであろう。ユダヤ人は、古くから「神が父である」という信仰をもって、神は近くにいることを確信していた。しかしその父なる神は、厳しく恐ろしいイメージであった。

（イザヤ６４：８、エレミヤ３１：９）

Ｑ「父よ」と熱心に呼びかけるときに、私たちのうちにどんな気持ちが湧き上がるでしょうか？

* 1. 「み名が聖とされますように」

「名」はその人の「人となり」神の本性全体を表す。ここではイエスによって顕された神自身を示している。神の本性をふさわしい尊敬をもって賛美することができるようにと祈る。

**２．「み国が来ますように」**主の祈りの中心的な祈願

「そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。 」（マタイ4：17）

「み国」とは神の国の意味で、神の支配が及ぶ世界。神の国を教え伝えることがイエスの使命

であり、イエスによって人間生活の中に神の国が示された。

神の国が来ていない状況の中で、悲惨な苦しみの中にある民の祈り。民の苦しみとイエスの苦しみが合わさるときこの祈りは力を持つ。歴史のどんでん返しを要求してはならない。神の国がいきなり訪れて、現在の状況をひっくり返すのを期待すべきではない。物事は相変わらずそのままかもしれないが、わたしたちの見方が変わる。内面の変化が大切。

「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。 」（マタイ6：31～33）

イエスの弟子になった人は、あらゆる思い悩みを父に委ねることを知っている。その人は、神が愛にあふれた父であることを知っているから。おん父は、必要なものを与え、ご自身の子どものように愛し、み国の実現を望んでおられる　。

**３．み心が天に行われるとおり地にも行われますように**

イエスは、み心を行うことがご自分の食べ物であり、世に来たのは神のみ心を行うためで

あるとはっきり語った。

「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」 「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」（マタイ26：38～44）

「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。 わたしをお遣わしになった方の御心とは、**わたしに与えてくださった人を一人も失わない**で、終わりの日に復活させることである。 わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」 （ヨハネ6：37～40）

1. 神のみ心は、小さな者たちの救いの成就

「秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。」 （エフェソ1：9～10）

99匹の羊を残して1匹の迷える羊のたとえを語った後「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」と語った。 （マタイ18：14）

「わたしの父のみ心は、子を見て信じる者が皆、永遠の命を得ることである」（ヨハネ6：40）

1. 「行われますように」と神の国の成就を願う。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。 （マタイ7：21）

「だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」 （マタイ12：50）

「み心」は、神によって行われなければならないが、わたしたちもまた、神のみ心を日々実現

していかばならない。

何といっても救いの計画を成就するのは神なのですから、この祈願を促すのは神です。「行われますように、成就されますように」の祈りは、おん父が望むことを成し遂げられるよう助けてください、と願う祈りです。

1. 天になされるように地上で

神の国というのは、み心が地上に完全に行われる状態を指す。ゲッセマニで「私の思いのままではなく、み心のままに」と祈られたキリストの祈り。イエス自身の生活の中心に神のみ心を疑わない決意があり、そこに生き方の基調があった。

イエスは、主の祈りによって神が完全にご自身を啓示しておられる場(天)をよく見つめるように招いている。わたしたちの信仰の旅は神の計画による目的地がある。イエスはわたしたちにそれを理解させ、地上でもわたしたちによって成就するように導いている。天が地に到来し始めているのです。

この祈りは、試練・魂の暗夜・苦悶のときに特に大切。祈りは平和をもたらし、苦しい状況の

うちに神の計画を読み取らせてくれるからであう。その平和は、神のみ心に自らを明け渡し、委ねることでの平和である。この世で、まだみ心が成就されていない苦しむ人の祈りでもある。不正と残酷さ、搾取によって苦しむ人たちの祈り。傷つきやすい人、貧しい人、正義に飢え渇く人の祈りである。

回心；自分の意思に従う生き方→神のみ心を受け入れ神を中心に生きる。この転換ができるとき

主の祈りの恵みと力が働く。

イエスはみ心を充分に受け入れ充分に実行した唯一の人。イエスの心に心を合わせて祈るとき、主の祈りは価値あるものとなる。

困難；神の国と自分の悔い改めは切り離せない。自分の思うようにしたい。（苦しみの根源）

「主よ、私が自分の望みではなくみ心を行えるよう、私を助けてください。」

事故・災害・貧困・飢餓などはみ心ではない。人間の業、罪の結果である。イエスはこの苦しみ悲しみに打ち勝つために来られた。胸の張り裂けるような決断、つらいこと苦しいこと躊躇するようなことに対処しなければならない。

後半　イエスが教えてくれた祈願の中心的部分。４番目の「糧」に続く３つの祈りは、わたしたち人間に関係するものである。

**４．私たちの日ごとの糧を今日もお与えください**

　　複数形・・・祈りにおけるあらゆる利己主義が排除されている。

《現在の》必要としているものに対する祈り・・・・創造主であり命を支える父なる神へ

「糧（パン）」には2つの意味がある。身体的・生物的な命に関わることを願うのは当然のこと、日々欠かせない食べ物・健康・家庭・仕事のための祈りである。さらに、信仰と希望という糧をいただいて、人間の尊厳を持って生きることへの霊的糧を求める祈り

「糧」を広くとらえ、私たちが日々体と魂を同時に保つに必要な今日の食べ物を与えて下さいと祈る。

ヨハネ6章での「パン」は荒れ野でヘブライ人のお腹を満たした食べ物と、魂の食べ物の意味がある。

「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」と祈ることで、わたしたちは聖霊の恵みであるイエスご自身をおん父に懇願するのである。イエスはおん父からの贈り物であり、人生の本当の意味を与えてくださる方である。

マタイ6：33

「何よりもまず神の国と神の義を求めよ。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる。」

神は食物、衣服生活に必要なすべてを知っておられる。「明日のことを思い煩うな」。将来を心配するのでなく、現在のことを受け入れ、それを神に委ねる祈り。神に対する信頼を言い表し、生活に必要な物質的精神的なものが全て与えられるよう神に願う。苦しんでいる人類と心を一つにしてこの祈りを唱える。飢えている貧しい人々の切実な祈り。

神の国の優先事項に照らして、今の自分の優先事項を調べてみよう。もし、物質的な糧だけを求めていたらこの祈りの本当の願いから離れてしまう。もし、心の中にある願いが真理・正直さ・正義・善さ・友愛ならば、わたしたちの優先順位は適切で祈りは本物であろう。

**５．私たちの罪をおゆるしください。私たちも人をゆるします。**

《過去の》私たちの罪に対する祈り・・・・人類の救い主である御子イエスへ

罪の普遍性、罪の意識が必要。

「もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理は私たちの内にない。」1Jn.1:8,9

神との和解を求める祈り。私たちが和解なしでいるとき地上に平和は訪れない。赦すためには、

ある種の度量が必要である。

「7まででなく７の70倍までも赦すべきだ」（マタイ18：21～22　参照）

　　1日が何分あるかを計算するならば「７の70倍まで赦す」というのは「3分ごとに赦すこと」を意味するのに気付く。お互いの赦しは毎日の生活そのものになってくる。

わたしたちは多くの事柄を、また失望させる多くの人々を赦し合わなければならない。期待に応えてくれ

なかったり、困ったときひとりきりにしておいた人々を「赦す」ということ。わたしたちは心に平和を作るために、絶えず「和解」を表現しなければならない。「赦し」は神からの祝福の本質で、キリスト教特有の賜物である。「赦し」は、それがなくては人間らしい生活が考えられない祝福。

わたしたちは皆、赦すことが極めて難しく、赦されることはさらに難しいことを知っている。主の祈りの「わたしたちの罪(負い目)をお赦しください。わたしたちも人を赦します」という祈願は、十字架上のイエス　の「父よ、**彼らをお赦しください**（ルカ23：34）という叫びが背景にある。過酷な苦痛を与えられ、十字架に付けられているにもかかわらず、イエスは赦しの言葉を口にしている。

**６．私たちを誘惑におちいらせず　悪からお救いください**。

《将来の》生活を委ねる祈り・・・・将来の援助者、保護者である聖霊へ

この祈りは人間の弱さと危険を訴える最も自然な祈り。この地上に生きる人間の生活には絶えず誘惑が存在する。試みや誘惑から逃れるためではなく、それに打ち勝つ力を頼む祈り。

　　　誘惑はいいふりしてやってくる。弱い私たちは自分の力で到底それを退けることができない。

ゲッセマネの園での弟子たちの姿。「誘惑に陥らないように祈っていなさい」

まとめ

主の祈りは「わたしたちの父よ」という親しみのある呼び名で始まりながら「悪」という言葉で締めくくられる。

「『父よ』で始まり『悪』で締めくくられるのは、信頼と恐れの関係を見つめるためです。わたしたちが恐れによって失敗が引き起こさないために、信頼だけが力を与えることを認識する必要があるからです」

シモーヌ・ヴェイユ

「終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように、 また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるように、と祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。 しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。」2テサロニケ3：1～3